雨物語 序文 下

はぐかとふを畧
きていふ真顔ハ顔貌の端正を調ひてをいふ
かるかといふまむくろ
べ・かるかハ片身の顔貌
のそろはぬをいふ兒の
ふをかるかるうといふもお
りひ合すべ・・・
とすりにりと　強き人を
書よせんとハ定めず
とも〇ゑどたいてハ上
にさろかとのようがゑ
てもありぬべきにといひ
しも書とせんよハあせ
原氏の考ハ石の上に
苔黒れるゑ今の俗ふ
おりひのといふごと

百以ばいそく　若とゝ作るのるゑ　下臈
ちやうちやうにゆきし時お
もしと思ふ人ゆききてえさせつるやう
前ふひさうるあるあそしなとヤセーやう
小　そ女　かるもいとまほるもゆるざとーこのゑ
好色
日ゆ　日とうの紀ほどのきゝごもまそこの人を
本妻ゑきくものゑ
とはりうよさも思ひそゞわゆゝび　きうーあゝくもゆ
よるべといはりひなゞら　き女ほかるちそゞれざうーし氣ゆる
ゆるゆーかるねゞ　ゆうゞーきさまそゑ　他の女乃りくも
とかくま

あさりいとゆきゝ〜さくこゝろぶん
待りしもうるさくて。
ゐるゝ〜きをりゝ〜も
待りて。とあろ二の二は
酒をぞねんさんをさあち
ろ〜ゆうよる人待しと
よ酒へうけてゆるぶし。
かゝる文章の体古文に
多くまさ。新よ赤んもうる
人ゝをさきりも是
しとゝるゝぶとよろ
しき女の恨をもふか
らぬいるをいれゝそ
嫉妬のゐをなゝぶき

ぎれあうき待りしを。[武女] の恐えんじをいと
うぐゝ
くし待りしうばゝろづきなうゝいとかく
わゝで 大やうなゝまゝぶのを
らでむいろうゝ待ゝぶと見ひて。おきり
由断きゝ
いとゆゝしなくうとがひ待りしもうるさ
くて。[あさりのことゝがよてい] かく数きゝぬ [ろんう] 分
きゝつゝそ
をゝもいるゝで。などかゝーもたりふらん
とゐんぐるゝきをりゝも待りて。[又] 志祈んよ

ばゝゝきゝ見れど。実のゐ
ようも女ハいへだ。おのゝら
ガをかへゆゝろよすがな
もうりねとゝて。

きゝれてゝ
んをさめゝるゝ。やうよゐん待りし。先女のある
ゝゝ
やうりとよう [ろかゝのゐれ] 見ひいろうぎりける
ことまゝ。いそでさの人のゝるゝとなれて
すゝう
をいぐし。おれゝうすぢれゐをもなほゝち
をゝゝは [見れは] みえぐと見ひきげみて。
とにかゝ
ゝるつきて。[信実ゝ] 抱おめゐゝるようゝろゝつ
ゆゝても [見が] なゝながふ事ハなくもゐれと

なびきてなよびゆき
こは女のんなるなよさが
ひなびきて。けてな
まめきけんけ女姫がを
くくくなつうかう
ぬさなりくと。まて
がふんとう。姿をもかよ
びふ。なまめくえ。次乃
結へうけてええ。
うと紀人ようこばおりてぶ
きうや。
後撰集ヨかざせども。老
もかくれぬとの。まこは。若
のおりてもふせうべく
ちり。白氏文集。外人
不見見應笑。

おりく。ほどよ。あちう。きくめるかとと見ひ
このど。とかくよ。それ女乃。ちびきてをよびゆき。
えんよくきかちをもこの人よりあうと
まれんと。わりれく。見ひつくあひ。うとき人
き教かちのえしびく。他人ことは女のえ
よみえば。ちるひ。おりてぶせるやおもをんと。
はぐかうちぢて。きをよりてつきて。
えにくもあるやうにぶられくと
えなるくまくに。
女の為くちのちかくわ
かくろも。若に

えふくはあくぎう
くうはあくびはりしかど。たぐ地。掛詞。にく
きかとひとも見。ひが。んをさめをはりしそ
のかみ。見ひ。見ひはりしやう。かうあるぐちよ
見れよ。
懲わどのるしおぢをる人なり。いで。その女乃
ちくばうりれわざして。おどして。この。掛詞。
かををきくよろしうもなり。はぐるもや
めんとおもひて。
うきれこせのわきもと
俗言。くちのうのきとくと
女のくをやふのくそもあくど。
は

ちが
神代紀ヨかくさうと
ふよ。神性の字を去ス
仁徳紀ようきちぐよ。吉
祥の字を去ス。性ふう
きれつきなくをいひ。

祥ハきざしをいへり。さ
れどもよきもあしきも同じ
詞也。こゝにハ悪きさだせ
のみがたしとあるも同じ
なり。さがなしとハこゝろ
あしきさがなしと
いへり。さればさがなしと
いふに不祥又悪の字
をこのめり。

ことに あだあだしき うちながらも思ひて。ひとすぢにいふせ

乃弁も たえぬべき もの こゝろしきるらば なにとか

ゆき かきのわされに心がふかゝらば。おもひ

うらなんと思ひたまへて。わざと怒むるやうにもてなして なさけなきやうになさけれ

ゐて くつきなきさかしさとらせて。女ハ まい乃ちら

まちえむぜらふ。まちえが云 かく そのかみの おそましく 今もあしきやうなるを

おぞましと云 いまハ富貴の類ふくむもの ぶいらじきちぎりふかくとも。中 たえてまう あひみて

見じ。さんも先までふて かぎりとおもちぐかくまり 無理

まろさ なき報よこゝろハせよ。彼さきなのぐく見

えんとおもをで。まとしの つゝきこともわりとも。

念 堪忍しそのふ之嫉妬の心を大概にして之 祢んじてなのめにおもひすりて。かゝる 拾祢

よみの んぶよらせるぞ。いとあちれならん思

ふべき。るひも 女位昇進して 人なみくかとあり。よそひも

まこしおとれ心ざんまそへて。おまへ まるさ

あくのトこんとうの
あくうるうし

ゐれたるくいひそー
我理づよくいふこと。
いひそーハ言殺の文字
のんうそ。つよくいふこと。

女の仏をこしらへ
ならぶ人なく あひだ あるべ紀など。 あ かーく
[ま女を]
をーへたつるうるとおりひなうへて。
ゐれたけく いひそーハ 言殺
ゐれたけく いひそー 侍るふ。 [ま女] まこと
うらわこひて。 [馬の沐] うるびよみだて。 取
しうあく
く。あのぎるきほどをえるして。人数な
る学をしやとうるこハ。と乃ばかよ異
なうれいうやーこもあるび。 [うるうる] つう

あひ[ま]ぶれ ま人なきよ
てハるるよ。ゐひびのくこ。
あ人なきへハ遮無うそ。と
なとうう 拒ありもまへ
ぎう参ろ人なきとうふ。
あひきーひ。あひきうる
どのあひ。は同じ。すー
ばるよといふも仰るる
なぐうすぎなきハよすが
なきを異ろこよすが
なきハたうるべよ和なき
をうふ。
そむよぬぎ 背向 そうび
にそむくハゆうるぎこ。
おうび 和名抄よ指也俗

きんをこのびて [まあくーく] おりひあうきうん
をうとうきんと。年月 年月をあきひてもつなほるべきうる志ほね
ゐ糸を新きむハ
なるのこハ。ひとうーこ。 [時の刻之]
互こ
みうそむきあべきれざみふなんある
とねうばよいふよ。 [おのれ] ちうだーく形うて。
ふくびなるこことでもいひをみきーゐるに。
女をこえ [ふを] をきあぬまちぎこて。 [日ゐ] 指
および

云於与比とありて。五の指ともに何のおよびといふ。されバおよびハ何の指をもいふべし。季指の中にのきるべらひ。季指ハ古於与比とあり。

およびをひきよせてくひて侍しを。お
どろおどろしくかこちて。かゝるきずさへつきぬ
れば。いよいよまじらひをすべきに
もあらず。はづかしめ給ふめるつかさくらゐ
いとゞしくなにゝつけてかは人めかん。[かくかくしハ]
世をそむきぬべき身なめりなど
いひおどしてさらばけふこそかぎりなめれ

手をおりて　伊勢物語ニ。手をおりてあひ見しことをかぞふればとをといひつゝ四ツハへにけりとあるよみをとりて下を云なり。

[illegible]

と此およびをかゞめて[女のり絵]まかでぬ。
手をおりて[年月]あひみし[中の]ことをかぞ
ふればこれひとつやは君がう
きふし[小事くてそあれかくかくしハ]えうらみ
じなどいひ侍れば。さすがに[女も]うちな
きて。
[男の]うきふしを[女の]心ひとつにかぞへきて。

あつまれまうまりたに
あくがれハうかれ心あくの約うとあり。○まうるといふことそれもとハ散ずるり。大内ハ百官あつまる和名ちりくゝ百官ちりくゝ帰るとまかるといふを本にて可

うゑ者ども（おとろうもとゝいふ）
まこと
ろひ侍かど。（おのき）
ゆとよハかゝるべきこと
ゝも思ふまへぞなどゝ。ゆゝろあるまで（久しく）
（おとこれもせぞ）
せうそこもせかそこび。（されどのゝハ法ゆゝるべきこ事）
（うかれあるくこと）
（ごゝもあくこと。）あくがれ侍とうけたまはれ。（加茂の祭ハ乃）
祭之　調樂
ふのてうがくよ。夜ふけていとゞうみぞれ
（注やうれやこ）
ふる夜これうこと。（大内より）まゐとあかるゝ而

居あり。他へ行去をも
いふ。よ指をうゞそはゝ
下にゆゝるといふをも
ふをはてゝくべし。
是ハ下の祭の間ふ　時時
の祭ハ宇多天皇れ御宇
ふ始既。十一月酉日之調
示ハ三前の午日程
まてあり。江家次第。諸
記録ゝ委し。
いうこゝ　是ハ下ハ祭
ゝ。ゆゝる間ゝ。ゆゝ乃
甚しきゝ。厳ゝ
いふ。
ちまゝりもゝびね。
あだといひ出せしよう。
内程ゝかり。ゝ。
旅ゝとハいふ。かゝるゝ

て。（ゝ）おりひめゞ。せゞ。（我）ゝゞと思て
んかゝゝ。（かの指くひの女のかハ）又なかり久。（されバとて大）
うちわゝ（かゝ後せんハ指さびゝくまゝゝかゝるきこ）
（お指の女乃ゝをまゞゝて）
しきゞあるあゝハ。（ゝハの時なかりゝて今秋の手ゝさ）
（ゝとけかゝ）
（にハ似つゝゞ）そゞろさむくやと思ふ指へられ
しかゞ。（かの指くひの女ハ）いかゞおゝへるとゝきも
是ゞゝ。雲を折ゝひて。（大内より）ゆゝ

いふじよ章よりおのこ之。

火ほのかにとよむべけ。白氏文集に。映々残燈背壁影といふよりおとり。おほいなるをあらけ。薫籠（フセゴ）の臥籠の中に大方のそとのの意を。あさめさるなるべし。

でなま人わろくはめくらるれど。（かの撫子の）さうざうしくひと日比乃うらみ（女の家へ行き）はどきあんと思ふ中将へしに。（主家の）火ほのかにかべにそむけ。あんしるさきぬどものあつごえうるおおいなるこにうちかけて。びきあくべきもおてかさびうちあでおあげて。ことひだかりやと（かの女の兄を）よちかるさめなり。

さうじみ　正身の字音之。さうをさうとあらずらうにいふ六行の例。さんをさうとい八燈をとうといふがごし。其人の正躰といふ事ぞ。今此の俗語之。土佐日記よ此ようきうさづきさ撰集の詞あまゆきうとる由さらとかよひて皆同じ。る之。○さう八万葉集よ云サレバ。ハルサレバ。春佐礼婆など。ゐる八。夕さあれバあうらにあれども義あるかと。下の詞を異体よいひなして。夕の事にいひなせり。

（呼ひしれく）されバよと（我）おぼしあはせてさうじみハなしさるべき女房どもおかりとまりて。（主女）おやの家にしよさめんあいうりぬるところ人侍り。（主女）えんなるさおもよおして。（中なるほど）りきぞえるせうそこをせて。いとひさやこもりになまけなかりしうぞ。あんなくさんちして。（常小君の）さがりくゆるしなきのをと

もし他人とちぎる男のあるときハそのとしふうしと称とハおりいしよやとふさうそしわ我をとハいへるなりと

うしろにするとを捨てやもるとらへし

しも。女のにハ男の家職ゆゑ祢と思ふかさの（うしあかしのんと）
んなありくんとはしを手月の祢さハみ絵へ
ざりしこそなれど、んや伸きまゝに
思ひ侍りしる。てるひろきるべき袖によりも（衣服）
うろこぞめたる。いろあひしざはゆらわら（染色うら久揉あぐく）（いうにもと）
耳かしくそ（そそうくと）ひらえてそてらひてあり。さすがに家をもんすて（女の家くワガ）
んぢちをさへなん。是女ハ家をおりひや里う（ふつる跡しそ介抱しにゆ之）

これハ為まてハさんとも上まゑんに袖をちらして。涙をもいはず。山里などにまどひありそ。人を悩ましそ。女の反對なるこそ。此女ハ夫人に袖をちらする作まあるは。かくやうしかんいへつとそいへる。

しろそうりしさまとも此女のやうに家と中出まえて
思ひをあるやうにそわらじと思ひのへて。
手後も上女ハとかくいひ侍りしを。家んのりゑむ
きもせん。みかるおんやうにおもひて男よりたづね
まどハさんそもかくまきのびぞ。それ女のみをむひて
（ありしおもうとおもひかくさき）（みるの知くやる知とゐし）（あさかりつとし）
かゝやうしかずいへてゆゑ只ありしん（たゞ男此人今まその）
あうらハえなんまそぐれよじき。今よりんを（やうなうハえるをはゞきまえ）

あらためて。[あらーをやめ] のどうよ見ひるべ

ちんあひみるべきちどいひーを。[さハ] さう

とも [はかまうえ] え見ひさるれどと見ひ弱へー

ゞ。ちばーー [き嫌妨のかを] こらさんれんて。[きこ女の]

いあやく。[あんかを] [女のつとこくこと] ちうあこくめんともいちびいこくいつ

あゝ体と [ちうこと] あるびきてみせーあひざよ。[きこ女] いとうこく [きの]

[事を] おりひるぐきて。[つひユ] [死ーこと] ちうあくなり結

[結] ひて 於遺集に平定矢引よもバあぢにハ

よゝこで。表紙のつる

ひよちうで。名ハこうと

や。

いこもれふて 載のまこ

とうこうて。興さむうとへ

小やく。こうさんちうと

とうこうて。つひこなくうり

しーへ。古今集に

ありねやとゝゝかてこう色

えねばさちひれこうき

まてを表ーー。

[死つたびめ] 吉田兼。高姫

の二神ハ風神にて。自くハ

梅陸るかぢの幸ーいあ

らねど。祝事のたある立

あーこ。[ちばーこうさんのこもれ結ぶとくあうて] 出ハむ

きこうあほどのを [今ハくやー] [男も女も] 元と今ゝ

おうくなんおぼえ結ー。

ちゝちちこうさんかこハ結だりこてあうねー

[大概のうハ其なりにて好こつき]

ゝと今こ見ひ出てなぎこえ

べくなんおりひのく出こう。[死女ひこう ちき氣とビ]

のつこあくいひがひちきたどひこハあゝで。こう歌きあぢこと

ちをも。はこうこ結大事ーをもいひあいをたこる。

かひちうこうひ。[後拾あぢのなぎこう] たつこびめとい

其女のやうと…
てる…
めのハ…
女のまへての…
とふめてる…
紡と…
しく…
女の詠語

田の神ますすゐよ後撰
よみうとに秋まもな
るう竜田姫。紅葉係の
山のてうらんなるより
なりて、是を後ハ立田姫ハ。
紅葉を染なせる神のご
とくいひなせる也。

たなばたのまうも。たなばたハ機おる女を
つかさどる神にて衣
縫ことをもいへり。万葉集
小古尓。織義之八多乎
此暮衣縫而君待吾
乎。足玉母手珠毛由良
尓。織機乎君之御衣
尓。縫将堪可聞。此梅
縫のはなやかなる事も
なふてとバの事ふいへり
とぞ也。

もんなもつきなうん。たちぬふ事ざハ　うなむうれ
手まもおとまじく。それらもぐしてう
なせくなん侍しそ。いとあされと　それ女のうそ
思ひいでうつ中ね　のこちふ　そのうなバ
されともねふうるを　きゞらく　のどめて。　うなぞうれ
なぐきちきるまよとそ　あさまし　ぐふ
それらの国乃まきのまをはずさぐくもの

とくはくとほ
めうる袖ふゆゆうれき
とハもの田しすなる人
しうたしきを田舎人
ハらうりいとのハ一木ま
うちいしとえうる所
いなかるいへるやく歌の
字れあるそいとよよ之。
それ方まそいそご昔ま
ハあまり何かもよろひ
ておまさくうるさしと。
あててほめてるよぶ之。
さればうるをせくるぞや
まらかよてよろし。
あくはゆ　仁徳紀ま巻
田よ宿輕ひね古今ま
あまりとん人よさし。
くるぶさろ久しきね
とよおえもことまれ。

とえ
あらじ。ちかなきぶりみぢといふもをりふし
のいろあひつきなく。むかしがたりめそ。
霖雨のさえなくきこえぬるワざなり。　さよく
さるふ
よりて　なかきよるそとハおり　かうき世ぞとハさぐ
めかねるぞやといひをやし。移ふさておくと
おるじ比　ころびゞ木ぶらり。　ほのりなよひし一六八。

人も　拾遺しのぶ　きちかうハ　ふぢせよりとも
ゆゑあり　人のらんよまきこるの名ある女とこゝにきこえありしとゝ　とみえぬべく　高など　うちよみ
を　きうがく　ことなど　かいひく　はるあと
つき　ひつき　みるたびごとに　書琴　ひきくらす
待　人　ほどハ　ことよなく　山ぶかう
人の　拾遺　ふぢせよりとも
なりの　紙　うちとけるかとて　はく　かく
のひてのこと
ろへと　待　ほどハ　ことよなく　山ぶかう

拾遺　ひの　女ご　死て後之
待さ　この人　うせて　ほハ　いぶハせん　わちれな
ごろも　すぎ　ぬるを　かひなくて　もどり
拾遺　ほとゝぎす　なく　まくよ　さとこし　山
ごゆく　本拾遺の女　えんよ　このよ　きこえ
みにしがくま　むべくも　ふえを　かなと　ぶるよ　ふを　ふせ　待る
ほどよ　ものびて　ふかよせ　ける
拾遺　おの　ゆ　めつ　うぬ　ぬあるよ　うちたの
拾遺　ほとゝぎす　なく　まくよ　さとこし　山
ごゆく　本拾遺の女　えんよ　このよ　きこえ
拾遺　おの　ゆ　めつ　うぬ　ぬあるよ　うちたの
みにしがくま　むべくも　ふえを　かなと　ぶるよ　ふを　ふせ　待る
ほどよ　ものびて　ふかよせ　ける

拾遺　ひの　女ご　死て後之
待さ　この人　うせて　ほハ　いぶハせん　わちれな
ごろも　すぎ　ぬるを　かひなくて　もどり
拾遺　ほとゝぎす　なく　まくよ　さとこし　山
ごゆく　本拾遺の女　えんよ　このよ　きこえ
拾遺　おの　ゆ　めつ　うぬ　ぬあるよ　うちたの
みにしがくま　むべくも　ふえを　かなと　ぶるよ　ふを　ふせ　待る
ほどよ　ものびて　ふかよせ　ける

拾遺　ひの　女ご　死て後之
待さ　この人　うせて　ほハ　いぶハせん　わちれな
ごろも　すぎ　ぬるを　かひなくて　もどり
拾遺　ほとゝぎす　なく　まくよ　さとこし　山
ごゆく　本拾遺の女　えんよ　このよ　きこえ
拾遺　おの　ゆ　めつ　うぬ　ぬあるよ　うちたの
みにしがくま　むべくも　ふえを　かなと　ぶるよ　ふを　ふせ　待る
ほどよ　ものびて　ふかよせ　ける

拾遺　ひの　女ご　死て後之
待さ　この人　うせて　ほハ　いぶハせん　わちれな
ごろも　すぎ　ぬるを　かひなくて　もどり
拾遺　ほとゝぎす　なく　まくよ　さとこし　山
ごゆく　本拾遺の女　えんよ　このよ　きこえ
拾遺　おの　ゆ　めつ　うぬ　ぬあるよ　うちたの
みにしがくま　むべくも　ふえを　かなと　ぶるよ　ふを　ふせ　待る
ほどよ　ものびて　ふかよせ　ける

人ありけらし。神な月の比ほひ月おもし
ろかりし夜、うちよりまかで侍るに、ある
うへ人きあひて、このくるまにあひのり
て侍れば、大納言の家にまかりとまら
んとするに、この人のいふやう、こよひ
人まつらんやどなん此女の家
はたよぎぬみちなりければ、

あれたるくづれより、池の水かげ
見えて、月だにやどるすみかを
すぎんもさすがにて、おり侍
りぬかし。もとよりさる心を
にやありけん、此をとこいたくすゞろきて、
門ちかきらうのすのこだつものにしり
かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろ

殿上　来會　車　武注ニ馬頭が父なるべし　殿上　将　通りみち

よきぬを　よぎは行過とよむ　のかみちハさらずて吹方

此下ニいふべからずとて

廊　簀子　又云椽之

万葉集ニ時雨ひとぞなどいふとぞ

久しきといふ心にあらねど
むかしのことをとむらふと
いふハ年月のあまたに對
して一时をさしていふ
にいひなせし也 新时の
意なり。
陰もよし 催するにおす
この井にやどりハまじし陰
もよし こゝもひかさむしみ
清くさもよし 此陰ハさげ
たるべきをとらるゝ八月新
まつりなさらともひハ武
烈紀に影媛が歌に玉も
ひよ水さへ盛といひ此れ
ハ水器の名也故に香水
をもさをひらいべしと
御くさハ御秣之。八名井
八幡記に記ふよるに大
和の明日香にあり。

十月の比の事なり
くるゝ夜ひとりして風よきたへるおとなれば乃
散乱
こぼれちるおもれとばかり見えけるに。附男ふ
ところなりはふえとりいでて吹ならし。
かげもよし郡きづきうちふきならしけり。一口ふきならしけり 内
よそ女も
よくなるわごんをしらべとゝのへ
かくてよく調子をあはせつゝあるとき
琴
うり心をとうけちらしかきあはせけり
揉あらハ女ら面白き体ともほめのしく 律
しほどこゑうハあらそかし、はちれしら 調

むかしへ一口つう
たふさぎさうふうたふ
べき时なりねバ之万歳
楽に堅塩をとりて
しろひと学ぶハかくま
りたる塩をとりひらき
く喰之。
和名抄に云
わごん
日本琴 體似箏短小
有六弦 俗用倭琴二
字 夜万止古止
律の調ハ 八名井の律
言之时ハ和名あれども
よつきて秋のしらべに
琴をもちてひきし时
さがひたれど今秋乃
月秋のおもろげあれど。
似つかずよハわらびとい
ひて又下に箏を盤渉

庭ハ女の裾やいらふにかきならして。まれ 簾
うちより見えける。和琴ハ今めきたるも
おくらきものをかきしめたる月も
をりつきなしともいくめぞ。その 簾
時節似合ふ
もふあはきて。庭のもみぢこそふ
みもけるあらかなれなど。とりて女を
詠ず
まつ萬歳折く。

にこそべつハ文字の綱よ。
あつさわしく。　おみ風に
庭の石燈ふこそ
きほ人るまみちのとい
へるまころふ古を来よ。
秋ハきぬ石ふハやど
よすりしきぬぞふる
おてらず人ハ音し此音を
ことばそして只春ぞう
でかよふ人ありげなるを。
それハさぞして糸の
ものふうくりふの音を訊
じいひて糸もまんと。
ことの糸も　琴の音も月
もがく折からのくるし。
糸の糸もえもいる守よ
此宿なるまたぐられ糸
人をとらじめぐるるそで
ろきしまえ。

琴

ことに糸も月もえならぬ宿ながら。（えもいはれぬおもしろきをいふ）

（河定家本ニハ二ヌ木トアリ云々）
（細タダナラヌ也　雅一ト通リデナイ）

宿

よろかよおろん

つま音きく人をひきやとめらる

あれとどめ給へね

（細　ヲワロキトシ　湖ニ前用此又ハ云々）

さるうめりなどいひたる。

いまひとつ気やすやさきべき人のある時

（湖　中ハヤス人トハ此男ノ身ヲ云也　花目彼ツレナキ人ハ琴ニテ中キハヤサズ我カク月ヲ中ハスベキ時ハチヲコサズ引キヘトシ）

よ。

琴花

手なれたい路そなど。いとくあされ（あまへざれる也）

（浙さまでひきなれた也）

かくきさば女いとうそ気にたくろひく

（此殿上人ハ女のふるをほめる古戯れ也）
（皆女ねらさすも祖也）

木がらしにふきあそすめる笛の糸（せうえうするあそび也）

あざれ　おちえ洒麗(サレ)な
らんおちえの詞を書き
て。おされといふ言也。
されの詞も既まくりく
いひつ
木枯よ吹かをすすめる
ことの気ふまといふよ琴
をそへ且木の気ふハとかう
しにも移らぬ理をへり。
此て殿上人ハかのよ待男(マツヲトコ)
ある様をいひしを思ハ
此の人乃るすハ思ひんが
からそまつれちまた人を。
やぞて殿上人よなして
よあり。かくわきらせて。
さくよみいづるぞおま
おもうよみてつまロつ
きたとびしかるぞ。

木枯よそよときて葉のいふよ（詞のそぞそく）

を。ひきとどむべきここちのすふぞあきことれ

すゑきかたそよ。

るいがんよ

よくあるきも志

らそ。又ゆうれたる琴ぜん志きてうよ志ら

筝　盤渉調ハ冬のしらべなれハ斗

べて今めかしくかいひきたるつまおもしろ（一うぞな）

（月よある也）

ききつるそあるねどはぞゆきここちなん（きたいへ）

志侍りし。たゞ何うちかくふみづえ

（湖細ニ時ノカタラヒニテハテハ糸ニテモ子細ナキトシ）

人ぞのおくるぐげまこぞこ志ぎたるハ。（恋れてねるきあきうらん）

さても見るかぎりハそろ忘くしおりぬべし。

よりや　時く　あか　月も待る暮まて　秦家十世　且

まれ相も見でもかと思ふ路へ人よハだれも

げなくさしきていうと人おのれくを

夜乃こともろくづきそそ。　女のちぎりハ

はかりもえにしが。　指切の女と。あかしの女と。　とも

ふかきこと絃おおむすぐるよ。　弓絃　且きく

時乃ふぶにあほさかりなりそいでろとと

ハいとあやしくたのもしげなくおぼえ侍

りき。今よりほとまして情のとなんいふ

ぬべらるべき。　以中将なりの　情のよくふさうバおち

ぬべきもの乃そ話ひろちできえなんとゆ

るまげぬうへ乃あるまるどの　やく　えんまお

えうあるをき　しさ乃にとてとり

きとら八荻のさき　古今集よ。

おそらぶおちろても荻のさき。

秋荻の枝もとをゝよお

きる白露さられ書八。

古事記よ佐く婆尓於

夜阿良礼能といつり。

さくの霰ハ常しかすえ。

うれんハなろめくうち。

ある女のもとへつかし。

あえり　あやうきと覚え

をききるきまのをあえり

とゝのもおやうげとゝのこと
くそれを結用しそバるる
きこととするもいへイ・されバ
たくるるきこととをあえる
きもいふ。

七ときあまりのかどよ
えバさて中ねよ對ていへバ中ねハ菱の上れ兄者
まバ法師サニ三するもあ
えるし・されバ今七ときを
をくんて・三十にもあり
殆ちぐ・何ものも兄れ合
されるべーといへる故
べし。

きたるあんん　きれバ色
ぶれることいふもきき人
とゝのもはるるそ好
をものの心とるむも上
のあえかといふこゝ同く。

人とん
くねぼさるるめ・今さるとも七とせあまりれ
ほどよおぐしきり侍なんなるがかやし
きいさめて・すきたるめるん女よハんをのを
殆人。

[女のあるまーきふるん]

あやまちして・[あれ]ゑ

達人ハ男ヲ云ニ

人人の・かくるるを・頑愚
をのるるといまーむ・中將きいのるるづく。

禁

[原氏乃]

君ときこそ・ばるるこそ・ハ

人なびきをきをいふ。
万葉にるゆ作のこを
よろ様といふるゆ作
のこをもといひけて。
ちよ〳〵とをやかるを
いふこをもとるも同じ。
ちーこるき作れ拾ゐを
ふこをいふるもちーこぬ
るもちーこるそとあり。
○ちーこ拾のたくぬを
こいやーきことるるぜん
方るきこるるいふ拾
拾のくるる方ういへ
るく。ちーとらふこを
れもとはあひゞのこと。
万葉に村るのあくをふ
ちーよといてるもあひゞ
古こるよあるるあゞまま
るもあるぬ作のあのち

思ものべうあり。[原氏の君はきまる]

いづかるよつきてし。

行すにつきるものこと

雅外ナロク尺クルシキ〳〵ロ　不都合ナフフカナヒヨニナ

人ろくちーこ童のろ侍拾がくろ
形もて・うちひ〳〵おきさうに中ねなふ

雅コザラセル、こえうハ　我分のくこ　君くるる。　くこありしとと異ナリてかくハいるく

がちきあく拾侍故せとて。[日が]いと

雅馬康モノ

しのびてみそめくし人れさてもこ

我願ニ入ー拾ナ

かくりしうゞ

つべかりしにそひるちーぶ。[形子ちらけて]なぐ

雅様子ソブリケブラヒ

なが

契るきこととそでハこ

ちふべきこのとを思ひくるくさるとーか

きこゆるもかまへてつね
おほえ氏のちしるく
いふ世間人とならざるも
ひ合せし。○なきハ俗語に
あくけなきせり。なきめり
がなきハ文皆ある。聖きる
きちやのなきと同じく
それとをつよくいふ時の俗
語にいちじあくけなきと
いふきことばへもなき
みいえん方なきなどのこと
なを略きてなきとのみぞ
へてつよくいふ。俗語に
かなるくぐひいと多し。
伊勢物語枕冊子は物語
も昔時の俗語もまじれ
ば俗語のまじりもあり
きとハ志しなるん。
志れもの　悪なる人をいふ方

どれいりよりあはれとおぼえしかば。
さえぐ［あぐらも］見せられぬをのよ思ふ給へ
しをさばかりよなれど（さほどまでになりぬればのこと）［女もそれを］うちの
めるしきをもみえき。［見れをと］たのむよつき
ては。［見どのこえくあるをむ女ハ］うらめしと思ふこと
もあらんと。［見が］なほざりなるをゆるさずも
侍しか。［此女ハ絶くなるを］見志るぬやうよくひ（此女恨むべきを怨みをも志らぬ顔）

万葉集に詠浦島子哥
に世間之愚人之とも
本朝文粋に白物左傳
注無悪世所謂白癡と
似るるの今の俗
に何も志らぬものを
志ろうといふも似
たるなり。
けてもいふべかりし
けてもいふべかりしぞ
ひたりしかば文次の多
れけるよあはれなる
あるしかばとある二
乃かばの詞をかえしとさ
ふ一つまでうけてぞ
文法之古文に多し。○
まぢらふべきあれども
おもひ人ぞちらしかども。
初の中ねさまくそしお

（さる生得の）さしき［見が］とぶらへをもかくせまはしのなる
人も。［此女ハ］思ひ出しなだ（ての約さへ）料みよりて
つきされたらんありさまにみえて。［あまりなる］
［りそ給ざりしと思ひおハしまされバ。］（昔方になる）ならるしかりしうば。
［それもさてかくひしまろひ］たのめつまれ給も
あるきかし。［此女］おやもれく。よるぼそけ
まてさしハこ人にてハとこちふおもく（中ねさまくすき）［下に］

もひ〜もひをこそ〜〜〜

いざや　いざハ否しやハうて
かりふうさぐりまわるぞ。
人の地問まてさぐるを
も平間のつよたがゐを
もいざるもいざもいて。
万葉集ハいざとよ
ふ不知の字を用ゐる。
ゐひ合せべし。

さと者ものこと也

人の多あれバいく恨
ことろるもあく言
ぎくあるべれど実
ふことあるとも有ま
りんかつぎるもえぬ
ゆうよりる深き貴人
の詞ものて言葉を
ゲ詞といこと。

山ごつの　タ魚のくひあき
方をたゝ人てきをあら

中ねのそうよ

いざやこと有ることもなこるまきや。
れハかけよなでーるれ言葉。
ゆひ出ーまるに。
例乃うらとあきねをぐ
ぐほまくあれる高れ嘉ーしぶ
者のめて。出れ称にきをへる行きむ

賤
山ごつれ　垣　慧
れあきをあるもをりくるあそ

子にしたる
牛乳どづまを女を
お

女ハ
ほうるをうしかバ

茅花
ほうるをうしかバ

山ごつの　タ魚のくひあき
方をたゝ人てきをあら

出ものるぶ乳ハあれど
二人の中のそもあれバ
なくの哀ハうけめ
と。謡ゑタ魚の者ハ
ゐけ者ものそもゆ古を
集に有る哀しみ今も
ものか山ごつの塩ものる
さけるやきと有でことと
ゆをもてよあり。
うもあま　うハ肉ん
をゐ生肉んもあくひ
さきうまるをゆ。
虫の称ときほへる　古今
集ふきりくすいくを
ゆそ秋の秋乃あぐき
ゐひハるれでまきれる。
とゆをもて出の虫ひ
と系男ひと競ーるき
ほうそなるめゆう

うう　ふみうもあくんきゆとそうく
う　地位めそておぼえはうし。

咲ずる　秋の　花ハ　いづまを　いづまを　わ
るどもなか　いもとうづある　とこるつよ　ちくをのぞ
ある　二人の中れるにくく
きやまとなでーこをばさーおきて。ま
塵
づちをぶよ　おやのんをとる。

中特をそうとそ解
うちちふ　よ絶てきませぬ衣
袖
を表ハ名

とて
むすめ相撲をきて　うち
ぼ相撲を後藤のむ
すめ　あれくるおひ
そうぬくうさぎをと
ちく似いり
咲ちる　桜花むのいづれ
もめでらるるが中に妹
と吾ぬるとこなろよ志
く和なりといふかの名
をもうつ名れどそれ
ようもまづそ好こを思
ふとして　好ちよ
えせ　女のふとる
え　接を考ふ八間
をぐら　二の名あるにつ
けて　接を八をであれ
むまうとえどこをうハ
あひぬる床よいひかて

のあるう　枕床のあれゆくふとふ
きよ以を　と　女　たうをげよ　男　をいひなて
実らーく
まめくーく　恨くるさ海をえこそ　女
志のびあまうて　波をゆらしおもーて　いとを
づうーくつ海しぶよ　まぐらちし
かくて　男乃　つらきをと　女化　思ひたう
以をと　男の方よ　ええん　寄せすと　以くくる
きをのと　女ハ　思ひうーしうば　色も出さあを

女のうくまくとうーくのく　知せ花　女を
をとして　私の赤をう
けてもかう　あれだ　女
をくとうをもうんうて
ここるれといひるを
花いをもらうしげて
ううーまうれだをそ
ーるもうを
ちうをぶに　古を来う
ちうをぶすうーとそ
ぶうさ知よういもが
ゆるこうるつのむとあ
をうて　女のふよけふ
べきもぶをうなを
治もるくをかきうて
かの四の来ふおをれて
をとうんうをきう海
迷うれで治もるかく

男のかうをそハおのづうゆくふきて　んやをくてみと
かうるる　ぶてえおきはうしほどよ　女ーを　治をなくくを
かき消をそうにを　かきけちてうせまーがるる　世よあうば
多くしきをうをきまうをくんを　をの形き世ををすらふくん　おのれが　あをれ
と思ひ　ほどふ　女ひさをうるをれ　ぶづうをし
げよおかれ　あををもしうるあほをーきもをうるる
かをうにうれ世ををてにををもをーきを　をのかにををーくくハ
くもあをーがうを用ざうるを　をよ形をいをぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これバ[illegible]
[illegible]
[illegible]

そうれもきこえハ
そ形を軽てなろう
かるゐ言すきふ〻〻
世間の女何も難あり
てくるふやうるー吉
祥天女こそ三十二相そ
ろひてよろしかん人と
思べ〻又仏法ゆえ
つうしゆゑ物語
べしと。

[illegible]の図し
ちご文章の生
大学察うて学問を
[illegible]武敬の気

びしうぬべりれとて。[原氏の考をそしめ]これ人
ゐひのゆゑぬ。[義]武敬が所ゆゑ。言きお
るうゐあんきこづかしやせを
せめ風。[武アらいちく]きもがきもれ中えな
でふるゆゆ百姓ゆんといへど。改の考まめ
やのみ考えそとせめ考へバ何る我そ
やさんと思ひめぐらさんとて。[武ア]ちご文

かりしゆのをかる
ゐ。

章の生ゆ時かしき女のくあしを
ちんん考へ。かの百姓の中考ゆう
に。おほやけごとをもいひあせ。ゐこと
ゐ。ちご文章は世ゆふべきんおきてを。
思ひめぐらさんゐもいふふくざえ
よきは考まんれをゐせをづうして。せ
べてくちあ考べく待ちざゐ。[女の傳入]

[illegible]
博士ゆ職員令
博士一人掌教授経
業課試学生ゆあり
拘ちゆれゐを。ゆべて
ゐ色ゆふ。

分際

文集秦中吟云主人令
良媒置酒満玉壺
座上勿飲聽我歌
道富家女易嫁嫁早
軽其夫貧家女難嫁

白氏

博士許

そ生ハあるえ年のそこ[illegible]がくえんな
ど仕ふ[illegible]まして。藤式ア きのうかひ[illegible]ほどふ。
その
あるじのむすめどもおちうとき
給へて。その[illegible]つひでよいひよる侍
を。おや きつまて 幸のそこゆうて さらづ
きもて出く。赤ちつれそうしまつる
やうきんきこえぐち侍うど。 拾なくふ[illegible]の

嫁晩孝 於姑 このゆく
[illegible]ハ[illegible]なれば む
[illegible]ハまるも[illegible]とる。
[illegible]侍べ

あのことなれど
をそくよりうちとけそもま
うしぬかのおやのんをちぐかりてさ
すがふかづづひ侍なるよ。 そ女それがを
いとあれておひうろみ孫ざあ
れかくひる。 それがら 才學 学 ものざえつき。於
ちやけよつうふまつるべきそ[illegible]
事をきこ[illegible]。ときよげよ。せうそ

こゝろをもぶる
こゝろふとゝふ詩乃
こと〻作文とふも詩
つくりてこゝろをれハ
あようゝおとふよう
ゝるべし紫日記
ふゝしまるれぬべう
おかゝるとゝるあゝよ
ゝをてゝあり

妻子をすてゝこゝろで妻の
るとゝろ

假字
こゝみ
文字をかくあるまゝ
かむなといふ拙を
たら
ちまぜびむ
しゝ
べくしく
を理を
いひまそし
ゝれ
ゝるゝお
ゝひゝゝれて中も
のづうゝえ
ゝれぬべし
たゝで
ゝれをのを
師
ゝてちん
ゝづゝるゝゝをれぶゝ
ゝるゝゝ
ゝなぶ
ゝるゝひ
ゝゝぶ
ゝゝ
今ゝ
ゝ
そのをゝハ
是
ゝれゝるゝゝどなつかゝき
妻ゝしゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

をのこ　もとは既
ようひ　めくいひ入る
とぐ　なんぞとつま
同じ　ものこと
つまつまと助子細の字
青之

世の中の男女すべて
宇問みき者は行るべしと云
うてまもりて女は宇問みき
るてふことあるべきこと

男は必ずもたうあるものとこと　子細
むをあり　をのこ　なんくさいなきこと
何のつまとみきうまる
のは行めるとヤ　せばのうをいもせんと
て　はて　をのこ　なりる女のなると　弐
あをひ中れ　まろ　いとひさしく　そもの女のもん　はかう
なること　鼻　笑ひをこらへて行べ
なぐら　ものあるうをごえてかう
俳優のきさる親をて
ある　扨　弐ア　いとひさしく　そもの女のもん　はかう
ざうしに　扨のたようよりちよるて行まし
ば　つねのうちとけ　ものるかるよ　行てん
ねを満てこと　そもよこと
やすしきこと　ものごまて　あん　その女　あひ
て行　えしくはかうざアて　ぬるてぶるよ
これをかうけ　中がゆる
やとをこかつ　こと　こ
よきこと　なるうも　おもものあるよ　ようり
男ハ　きさのしく人　男どもぶんをも　ちるかばくき
怒
扨えんじ　ものべきこと　あらば　世の　理

ごくねちのさうやく
極熱の草藥えん蒜

しゝ女まれば
男ひとりてうみざりけり。行基菩薩ゝと也

めつぼし女
うるもきやりこうて
いつもう月ご

風病
腹病ゝ猛のゝ
ろふびやうおきよたへのねて。だら新

草藥
ちのさうやくをぶくして。ゆとくさ
えいけ月にうらめ
ようきんえらいめんねさうぬ。ものあうう
もえ
らびともさうべこうんばうじちはうき猛

可然
雜事等
むらうえ
ちうんもむべしくいひ

いと奉ふ詞を
のべていとをえ
でえんこうちうえ
あいうえおかきく
の詞をいふいとふ
も字考あるべし。
乃何と唯の考と物
づうあるものえ
ばいと多し。

蒜を猛しうるものえうてんつきうゝ物ふれてうぶつき
返答
詞とろきえ

はう。武ア
いんよあたとをいえれはうん
ほ物とぞういえ
たぐうひ猛きういえ
きびなくあひえもなきうにゆ芝名
ムロ
はうぐしくやおがえきんこの香う
もくやこうれば芝せんとて
せきん吋ようちようのへとだやういを。
きうるくいふ
そのあ一にて
ホうて
きぐさんをいちい。
されば
ホて
ちぐしうちやきうふだきうはうねぐ
と切て。ぶをつえてとばぐふぶをいやう芝ぐ
なくてとていあうぐの詞ハおくようめてうぐし。
ホとうんよつ

ちぐぶの　糸ぐさ

とぶさぐぶのえつきこ
ても。ちぐく有りんわを。
今文に登呂をとせを
の結ふいくいひよを
てのぐまのふるやと。
蒜と登のこれさの
ひしをひて。登に
蒜をそくう。○さだ
のふるまひ。日本紀に糸
せをが。ぐきよひあき
がよの。くものあとなひ。
こぐひちうしもとあと

名女王

げよその　きくやれぐきの　ふほひさくるや
うよたちうくうとまぐなくて。ふげめを
はひく。
さくめよ乃ふるやひ　三宮男のまぐきと　ちうき
夕ぐれよ。ひうちまてぐせをいがあやれさ。
いくなうふかとつきくくやとくいひをそてび。
はちう出ぬうよ。　四女　おひ　四　て。

人を返かけりさせてはかるとやる。

海の神ふくものうち
ひとあるようちうと
まゆ。

あうちの　おをてで
ぎあふほぐの中ちうぶ。
屋間のくふやんも。など
うおちくづうめんと
くうれも屋に蒜をそ
てう。まぐゆきふおも
まぐゆきうて。せ面
をぐきて。ふはぐゆ
きとうるまぐし。

さちうれをうくうきを
ひんちうふをんくやうう
界とうひゆうとうと
まきうちとうつし

毎枝をほとの中なうぐ
遣とものようをーーとぐてあ中な
らば。ひうくを蒜をうね　畫に蒜をうね
ちすがよ　四女　くちうくなどそ佐きと。
きづくと　武子　中せば。　源氏　阿中名の　君ぐち。
あうとおちして。そうぐてと日
らひのよ。　さくくきくハくとにううぐきくと
じんざやうよとうるあうれか
いづうこのけるる　女うあるぐてき。
おいうるおうとうてむてひのくうあ。

あゞめ　家發とらへて。
ひらきちらす　えをそ
のとゝ　式アゲ物語を。
ひとゝろ　しとゞひちら
しのふをいふ。

渋　しとゞ　ひちらして
うとゝ　みくもとらへ
河へ

むかしまことつまゝじをして
いたんかさきと式アをあぢをふくみ
て　きてよろしかんことをゝせと
せめ給へだこれようめづらしきことハ
きてひなんやとてをとゝめ。
夫べく男もめもまろものハどづく
ゝ　れるかゝをのうり形く。
人せつく

三史　史記　漢書
後漢書
五經　毛詩　禮記　春
秋　周易　尚書

さんしゝ　さんしゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の様態をまねぶ　似つかしかぬ形容

[人よ]　よみかけ

[かやらの]　かやらのかりまくまくとと人と仮もうさるよく

[ようこうらん]　ようこうらん

[四へ]　せぐ

[のうさうえ]　ハたらしなるうんざうべき

[さうき]　いそぎて

[つるよう]　節会などみ月のぜちる

[大四へ]　まゐるあしたるよのあやめをお

[はるども]　はるどもいとまもなきあやめ根とひけ刈ものを

[ぜちる]　ぜちるぬよえなるぬ祝をひ

[ようこうらん]　ようこうらん

[ぎ〜〜八]　九日のえんにまづかく

難　ゑ

[ぎをはてそ]　詩のんをおもひめぐらしいと

[ぎ]　ぎ

[ぎ]　ぎ

[ぎ]　ぎ

あとかたもなくなりぬるとかなしさ
さてもあれこれとかたりつゞけて
あれこれとかたりあはせて信言と物と
せはしてやむとまくるみすの
とふこゑしるすとゝとゝ
てやらるゝなりけるせはしてて
あれとふこゑ

きてもあべくるとくるこゝろの。[かいそがき]そ
のをうふつさなくめるとゝほゝぬ
[事]あぐをを。をこゝろびよみいでゝる。
なまなかなるふる
中〳〵[その人乃]ゐおくれてこゝほよろづ
のこゝろふちどかはざてもかはゆるをう
うゝ[こゝ]時〳〵思ひ出るあぞこのあれんな
ゐねざこんが
てこゝよりたみあるけざ〳〵ざらん[こゝてかは]

おほえあの
[アて]めやきゝ。をべくこゝろ。をれ
こゝをも
らん事をも。をこゝをでがうをてな
[ひとをきこゝ]
しいをを。こゝうこんこゝをもひとりふ
よつ乃姫。[いをを]をこゝすぢくなんあ
義経のはるこゝ
べゝうるなゝいつゝ。[源氏の]君ハ人ひと
[あをひこゝるをゝ]
アの出あこゝをこゝろのうちに思ひ
[をを人こゝをハ]
つゞをゝ。これハたゝを。こゝさ

しきぐさ　こうこと　れくもあり　法ひ

ゆるかなと　世よ　ごろ　あつかぎ　ろも　い

とぐも　ねあ　さ　ぬ　ぐ　あ　ぬ　ぐ　ろ　ひ　し　女の　六　ん

づ　ろ　ふ　ふ　ろ　ま　ろ　も　れ　く　そ　く

ハ　あ　や　し　き　こ　と　ぐ　も　の　ぬ　ろ　う　ど　り　な

り　て　有　な　ろ　ひ　た　ち　た　ち　ひ　た　た

浪速　高載陽寫

安永六丁酉年初夏

出雲寺文治郎
風月庄左衛門
吉田四郎右衛門
梅村三郎兵衛